

# 長崎県感染症発生動向調査速報

平成26年第5週 平成26年1月27日(月)～平成26年2月2日(日)

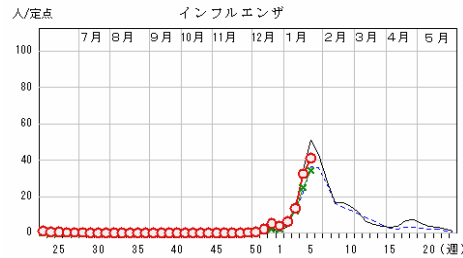
定点報告疾患(定点当たり報告数の上位3疾患)の発生状況

## (1) インフルエンザ

第05週の報告数は2871人で、前週より598人多く、定点当たりの報告数は41.01であった。

年齢別では、10～14歳(624人)、6歳(212人)、7歳(200人)の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、佐世保市保健所(55.64)、対馬保健所(50.00)、県北保健所(48.00)が多かった。

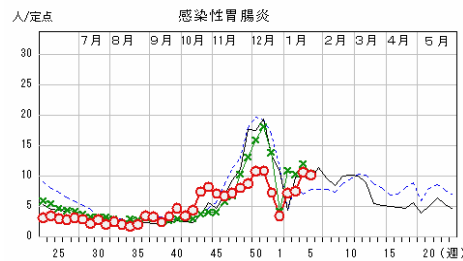


## (2) 感染性胃腸炎

第05週の報告数は447人で、前週より21人少なく、定点当たりの報告数は10.16であった。

年齢別では、10～14歳(70人)、1歳(58人)、5歳(39人)の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、対馬保健所(19.00)、上五島保健所(14.50)、県北保健所(12.33)が多かった。

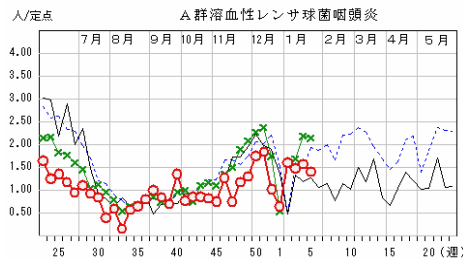


## (3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第05週の報告数は62人で、前週より7人少なく、定点当たりの報告数は1.41であった。

年齢別では、5歳(11人)、6歳(9人)、4歳(7人)の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県央保健所(3.67)、県南保健所(2.60)、県北保健所(2.33)が多かった。



○ 当年(長崎県)      — 前年(長崎県)  
× 当年(全国)      - - 前年(全国)

## トピックス・季節情報

### 【インフルエンザ】

長崎県における第5週の報告数は前週より598人増加して2871人でした。定点当たり的人数も上昇して前週の32.47から41.01になり、今週も警報レベル「30」を超えています。県内ほぼ全ての地区で警報レベルを超えており、壱岐、五島、上五島地区についても注意報レベル「10」を超えた状態にあります。警報レベルを大きく上回っている、佐世保市地区55.64、対馬地区50.00、県北地区48.00においては特に今後の動向に注視していく必要があります。

例年、地方におけるインフルエンザの流行は年末年始の帰省客によって都市部より持込まれたウイルスに端を発して本格的な流行が始まり、1月下旬～2月上旬に流行のピークを迎えます。年齢別にみると、第5週に報告された患者全体の約半数を幼・小・中の年代が占めており、学校等での流行が推察されます。受験シーズンを迎え、人の移動が多くなる時期ですので、今後の動向に注視し積極的な感染予防を心掛けましょう。

インフルエンザには抗インフルエンザ薬がありますが、予防にはワクチン接種が有効な手段の一つです。小さいお子さんや高齢者はもとより、受験生の方も体調管理に十分に気をつけましょう。また、外出からの帰宅時のうがい・手洗いの励行や、マスクなどによる「咳エチケット」で積極的な感染防止に努めましょう。

### 【感染性胃腸炎】

第5週の感染性胃腸炎の報告数は前週より21人減少して447人となり、定点当たり的人数は10.16でした。長崎県下すべての地区から散発的に報告があがっています。今後の動向に注視し、手洗いの励行を心がけましょう。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くを乳幼児が占めています。原因はロタウイルス、ノロウイルスをはじめとするカリシウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌

などの細菌が原因となる場合もあります。

原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に、小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるようにしましょう。

【A群溶血レンサ球菌咽頭炎】

長崎県における第5週の報告数は、先週より7人減少して62人となり、定点当たりの人数は1.41でした。県央地区3.67は他の地区に比べ、報告数が多いようですので、今後の動向に注視していく必要があります。

本感染症の好発年齢は5～15歳で、鼻汁・唾液中のA群溶血性レンサ球菌の飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1～4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により多くは1～2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早期に医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

**トピックス：インフルエンザが流行しています。**

インフルエンザは、インフルエンザウイルスを病原とする気道感染症です。他の原因によるかぜ症候群より重症化しやすい傾向がありますので注意を要します。1～3日間の潜伏期間のあとに38以上の発熱、頭痛、全身倦怠感、筋肉痛・関節痛などの全身症状が突然現れます。これに続いて咳、鼻汁などの上気道炎症が起こり、約1週間ほどで軽快するのが典型的なインフルエンザの症状です。呼吸器、循環器等に慢性疾患を持つ方は、その病状が悪化することもあります。小さなお子さんの場合、熱性痙攣や気管支喘息を誘発することもあります。

インフルエンザの流行パターンを全国レベルでみると、例年11月下旬から12月上旬頃に流行が始まり、年が明けて1～3月頃に患者数のピークを迎えます。ところが、大都市を除く地方では年末年始の帰省時期後の新年第1週から流行が始まり、以後患者数が急増して1月下旬から2月上旬にかけてピークに達する傾向にあり、本県も同様の流行パターンで推移しています。基本的には4～5月にかけて患者数が減少していきますが、ここ数年は春先に小規模な流行が再燃する傾向にあります。

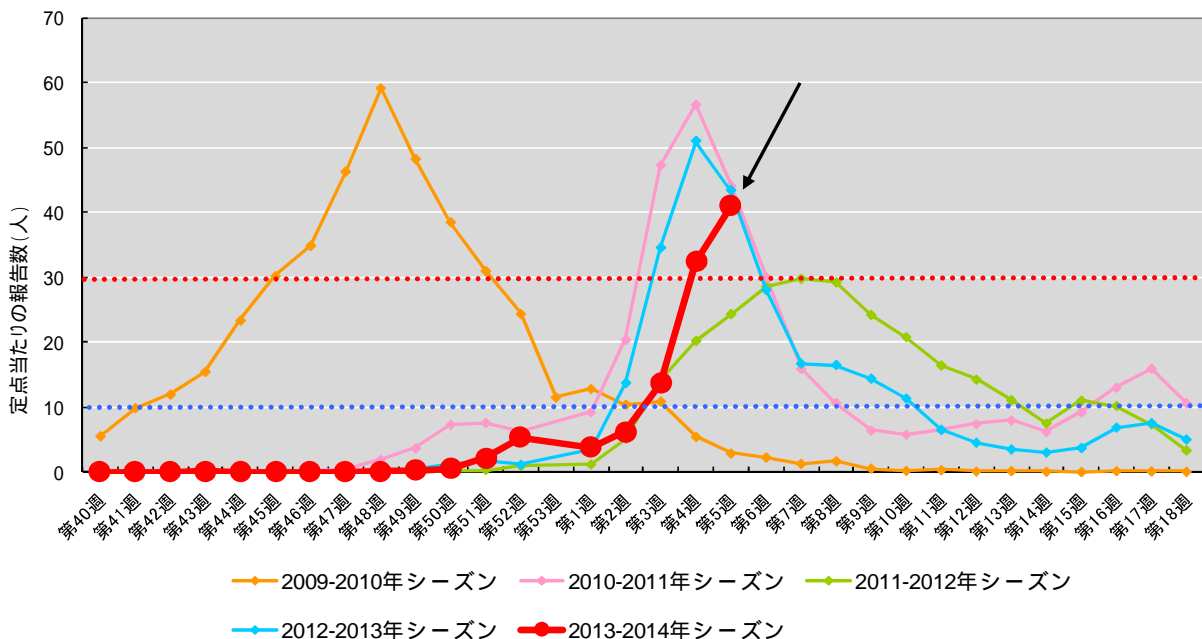
感染経路は、咳やくしゃみの飛沫による飛沫感染と、飛沫等に含まれるウイルスが付着した手指で自分の眼や口、鼻を触ることによって成立する接触感染があります。

予防には、ワクチン接種をはじめ、日頃からしっかりと休養をとり、バランスの良い食事を摂ることで免疫力を維持することが重要です。また、上記のような経路で感染が成立するため、手洗いの励行、外出先から帰宅した際のうがいの徹底なども有効です。

当センターに搬入された、今シーズンのインフルエンザウイルスサーベイランスの検体から、インフルエンザウイルスB型、A/H3型(いわゆるA香港型)および2009年の流行の原因であるA(H1N1)/pdm09の遺伝子が検出されました。

本県においては、ほぼ全ての地区で報告数が増加傾向にあり、それに伴い学級閉鎖や学年閉鎖を行う施設も増えてきています。積極的な感染防止に努めましょう。

長崎県におけるインフルエンザ報告数の推移



インフルエンザ・長崎県(2014年第5週)

	今週		1週前		2週前		3週前		4週前		5週前	
	定当	状況	定当	状況	定当	状況	定当	状況	定当	状況	定当	状況
佐世保市	55.64		49.36		21.55		8.00	-	5.73	-	13.09	
長崎市	42.24		36.24		12.88		7.00	-	2.24	-	3.76	-
杵岐	25.00		13.00		15.00		4.67	-	1.00	-	0.33	-
西彼	31.17		28.00		9.83	-	3.50	-	2.67	-	2.67	-
県央	42.00		24.70		11.80		4.10	-	2.10	-	1.10	-
県南	43.50		29.75		13.38		5.75	-	5.13	-	2.25	-
県北	48.00		55.25		24.00		13.25		12.75		20.25	
五島	17.60		12.80		2.60	-	4.00	-	2.60	-	0.60	-
上五島	27.00		20.67		11.67		6.33	-	7.67	-	10.33	
対馬	50.00		25.00		8.33	-	4.00	-	0.67	-	0.67	-
長崎県	41.01		32.47		13.63		6.19	-	3.87	-	5.30	-

警報・注意報レベルの基準値(定点当たり報告数)

- :警報レベル
- :注意報レベル
- :警報・注意報なし

警報レベル		注意報レベル
開始基準値	終息基準値	基準値
30	10	10

<今冬のインフルエンザ総合対策について>

(参考)厚生労働省ホームページ平成25年度今冬のインフルエンザ総合対策について

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/influenza/>

(参考)長崎県報道機関向け発表(インフルエンザ流行警報の発表を閲覧できます)

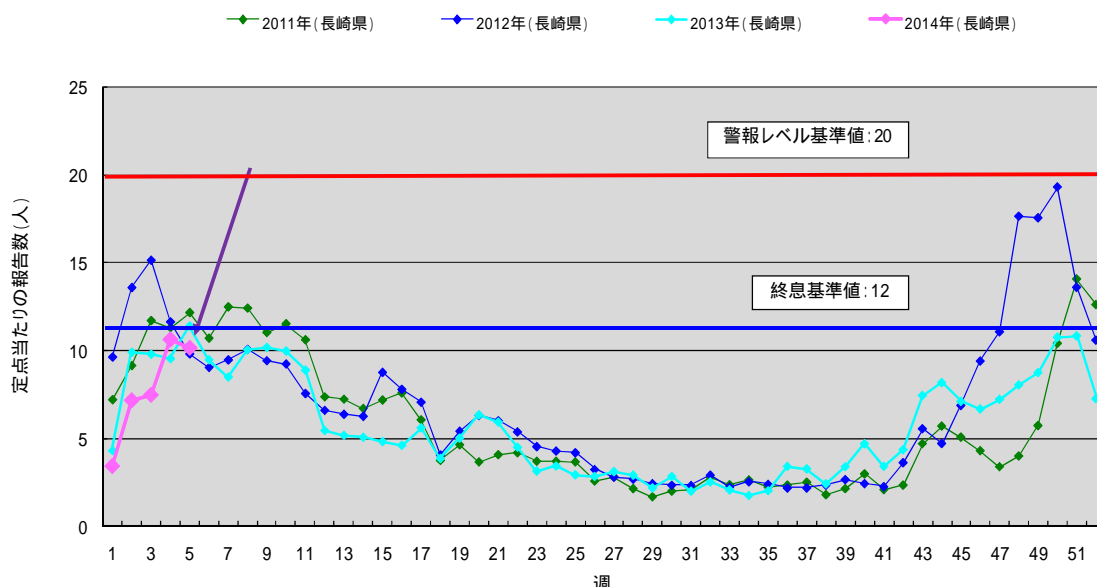
<http://www.pref.nagasaki.jp/press-contents/index.html>

**トピックス：感染性胃腸炎に注意しましょう。**

昨シーズンは、全国的に感染性胃腸炎が流行し、過去10年で平成18年に次ぐ高い水準の患者数を示しました。全国各地でノロウイルスによる大規模な食中毒や福祉施設等での感染症関連のニュースが取り上げられています。

本県においては、年末年始にかけて患者報告数が減少しましたが、第2週以降再び増加に転じました。

例年10月から11月にかけて流行の立ち上がりが見られ、12月中旬頃がピークとなる傾向にあることから、11月20日に、厚生労働省より「感染性胃腸炎の流行に伴うノロウイルスの予防啓発について」の通知が出ました。今後の動向を注視し、手洗いの励行に努めましょう。



感染性胃腸炎における2011年から14年第5週までの推移

<ノロウイルスに関するQ&A>

(参考)厚生労働省ホームページ ノロウイルスに関するQ&A

<http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/kanren/yobou/040204-1.html>

